

れいめい

〒869-0502

熊本県宇城市松橋町松橋1455番地1

TEL 0964-32-3111

FAX 0964-32-3112

<http://www.reimeikai.jp/>

2011年9月（秋号）

宇賀岳病院理念

誠実な医療を実践し地域に貢献します

基本方針

- ・地域ニーズに応える
- ・安全な医療の実践
- ・魅力ある職場づくり



日本医療機能評価機構



副理事長
中村亮一

「地域医療支援病院」に向けて

拝啓 地域の皆様方には、常々、

変わらぬ御支援、御協力をいただき深く感謝申し上げます。おかげ

様で去る七月一日には開院二十七周年を迎える事が出来ました。新

築移転工事も着々と進んで、病院機能評価バージョン六、社会医療

法人資格獲得と大きく前進することができました。厚生労働省、県

庁、宇城市役所の適切な御指導と清水理事長、江上院長をはじめ

全理事、全職員の懸命の努力の成果であり喜びにたえない次第であります。

さて、本年は既に呼吸器内科医、

米良昭彦先生、放射線科医、前田陽夫先生、整形外科医、大多和聡

先生と三名の新進気鋭の先生方が

着任され、それぞれ専門医として活躍しておられ診療体制が大きく向上致しました。

また、看護師九名、他コメディカル部門においても新入多数の入职があり、存分に働いて貰いたいと期待致しております。

次の目標は「地域医療支援病院」の資格を取る事であり、ハードルが高くて一朝一夕には実現できないと思いますが、一つ一つ要件をクリアーして努力していきたいと思っております。そのためにも、地域住民の方々の絶大な御支援と御協力が必要不可欠であります。特に御面倒ですが、かかりつけの先生の紹介状を御持参されますよう、切にお願い申し上げます。

地域医療の最前線で頑張っておられる開業医の先生方とも強力に連携して行きたいと思っております。又、大学病院をはじめ多くの病院、診療所、施設とも更に連携を強めて行きたいと思っております。



新築移転実現は来年秋の予定で、これを機に「宇城総合病院」と名称変更することになりました。その名に恥じない病院になりますよう、懸命に努力を続けて参りたいと思っております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

敬具

病院機能評価 Ver6 認定



看護学生臨床実習を受け入れ



看護部長
松本佳子

看護師不足が話題となつている昨今、当院においても例外でなく、通年看護師募集を行っております。そのような状況にあつて、看護師を目指している看護学生の育成は不可欠といえます。

当院では平成19年度より看護学生の臨床実習の受け入れを始め、現在では4校、延べ170名の基礎・老年・成人・小児看護学等の幅広い分野で、看護実習生を受けております。

実習を受け入れるに当たり指導者育成も必要であり、平成18年度より「熊本県看護学生等実習指導者講習会」を毎年受講し、現在11名の講習修了者を有しています。

日々の看護業務を行いながら、看護学生を受け入れ指導することは非常に大変なこともあります。しかし、学生さん方からさまざまな刺激を受け、感動したりまたは看護の原点に帰るような気づきをいただくこともあり、私たち指導者も日々多くの事を学ばせていただいています。

看護現場は厳しいことも多いですが、やりがいもあります。卒業後は私たちと一緒に働くことになるかもしれない学生さんです。これからも多くのことを指導していきたいと思ひます。



気仙沼市立本吉病院への短期医療支援に関する報告書

小山田 直朗



平成23年3月11日に東日本大震災が発生したが、それによって常勤医を失った気仙沼市立本吉病院に対して、短期間ではあるが医療支援を行ってきたので報告する。

期間は平成23年9月11日から15日までの5日間である。11日と15日は現地への往復移動に費やされ、実働は12日から14日までの3日間である。支援内容であるが、入院機能を喪失しているため、外来診療のみ午前午後の計6枠行った。1ヶ月間の予定で支援に訪れていた小山和彦医師（呼吸器内科）と二人体制で、一日におよそ65人前後の外来患者を診察した。多くが軽症の再診患者であり、本院ともいえる気仙沼市立病院への紹介患者は、全期間でわずか2人であった。また13日は夜間当直を受け持ったが、統合失調症らしい受診者を警察に保護させた1例のみであった。

前述のように外来患者の多くは再来患者であり、新患も重症者はほとんどいなかった。しかし患者すべてが、派遣医師にとっては新患であり、既往歴などの確認に時間を要したものの、卒後数年の医師で十分可能な外来業務であった。

本吉病院であるが、人口11,000人の本吉地区で唯一の医療機関である。38床の入院病床を持ち、2人の常勤医師（定数3）が在職していた。同地区の人口10万人当たりの医師数は18となり、全国平均（206人／平成18年）と比較して極めて少数であった。ちなみに気仙沼市全体でも、人口10万人当たりの医師数は75である。元より深刻な医療過疎地域が津波に襲われたことになった。

昭和22年に町立病院として開設された同院は、県道より数m低い敷地に立地していたため、大きな損害となった。県道と面した反対側の民家群は、床下浸水程度の損害で済んでいる。2階建ての1階部分に病床を除く多くの病院機能が集中しており、およそ170cmの浸水で、医事コンピューター・分包器を含む薬局機能・CTを含む放射線部機能・超音波機器・内視鏡機器・血液生化学検査機器が被災し喪失した。残ったものは2階に置き忘れていたポータブルX線撮影装置のみであり、これに現時点で貸し出しを受けている。超音波機器と血液生化学検査機器のみで診療が行われている。エレベーターも復旧していなかった。カルテも様々な程度で汚染されているため、震災後は1受診1ページの新しいカルテを作成し運用中である。旧カルテは過去の資料としてのみ使用されている。

現在本吉病院は病院ではなく救護所として取り扱われており、9月末までの予定であるが、保険診療を行っていない。医療費がかからないため、多くの病院機能が復旧していないにも関わらず、震災以前とほぼ同数の外来患者が受診している。むしろ被災者の経済事情を反映してか、診療圏は広がっている。

前述のカルテ事情と保険診療を受け付けていない現状から、診断書の発行は行われていない。

10月から常勤医1人の赴任が決定しており、保険診療が再開する。窓口での支払いが発生した時に、外来受診患者数がどのように変化するか、税収の望めない状況下で、高額な復旧費を必要とする唯一の医療機関がどうなるかは、予断を許さない。

現在新病院建築中であり、設計変更は困難であると思われるが、可能であればコンピューターサーバーは2階などに設置できないかと考える。

平成23年9月20日



震災直後



現在



震災直後



現在

新任医師紹介

宇賀岳病院 整形外科 大多和 聡

平成23年6月1日より整形外科で働いております、大多和と申します。山口県出身で昭和62年に熊大を卒業し、整形外科教室に入局しました。大学院を卒業した後、大分県竹田市にあります、竹田医師会病院で日本第三位の高齢化率を誇る山里の地域医療に15年間従事しておりました。得意分野は特にありませんが、「誠実な医療を実践し、地域に貢献する」という宇賀岳病院の理念に従い、スタッフの皆さんと仲良くやって行きたいと思っております。



さて、赴任いたしました日が浅いのですが、接遇委員を拝命しました。私が医師になった24年前には接遇などという言葉聞くことはありませんでした。世知辛い世の中になったと感じていますが、身だしなみも言葉遣いもいい加減な私は接遇の反面教師的存在として、接遇委員長の朝田副看護部長にご迷惑をおかけしないように頑張りたいと思っております。

関係医療機関の皆様、微力ではありますが、宇城地方の地域医療に貢献して参りたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻を頂ければ幸いに存じます。どうぞ宜しくお願い致します。

回復期リハビリテーション病棟の紹介と取り組みについて



作業療法士
松本南美子

当院の回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期病棟）は43床を有しており、脳血管疾患や整形外科疾患の患者様が多く入院されています。回復期病棟は患者様の自宅復帰が一番の目標です。リハビリテーションスタッフや病棟スタッフが協力して、患者様一人一人により良いサービスがご提供できるように、毎日カンファレンスや回診等の話し合いを行っております。その関わりの中で、今回は「衣服を着替える（以下、更衣）」に対する取り組みをご紹介します。

回復期病棟では、患者様がより早期から更衣が練習できるようなシステムを作り取り組んでいます。その目的としては、①日常生活動作（起きる・座る・立つ・着替える等）がなるべく自分で出来るようになる②生活感を出す・生活の質を上げるの2点を掲げています。取り組みの内容は、ご家族様に日中着を持ってきて頂き、朝と夕方に寝衣と日中着の更衣を行っています。方法としては、リハビリスタッフや看護師・ケアスタッフで更衣の評価を行い、練習

が必要な方にはリハビリスタッフが関わり、見守りや声かけで行える方は看護師・ケアスタッフが関わり更衣を行っています。そして、日々患者様の動作は変化するため、定期的に見直しや必要なディスカッションを行い、その結果をパソコンで管理しスタッフが統一した関わりが出来るように工夫しています。この方法で取り組み始めて3ヶ月が経ちましたが、より早期から更衣を取り組み始めることで患者様やスタッフの意識の統一が図れ、より動作能力の向上に繋がっている印象を受けています。また、「今日のお洋服は特に素敵ですね」「これは〇歳から着てるのよ」「タンスのあそこにしまっているから」など患者様同士やご家族様・スタッフ間のコミュニケーションを図る場となり、会話や関わりが増えることで多くの方の表情の変化や心境の変化のきっかけとなっている（生活感がでて印象も受けています）。

当院は、宇城地域の中核病院としての役割があり、回復期病棟は皆様が過ごされている地域生活により密着した病棟である必要性があると考えています。その為にスタッフ全員で患者様を支え、急性期から回復期・自宅へと切れ目のない治療が提供できるように最善を尽くして参りたいと考えています。今後とも宜しくお願い致します。